

通機会だより

創刊号

昭和56年11月発行

通機会の活動再開に際して

会長 大賀 寿郎

通機会が発足したのは、通信機械工学科と称していた我々の学科が、最初の卒業生を送り出した1964年であった。その後の紆余曲折を経て、通機会は、その存在価値を発揮すべく活動を再開した。

発足当時は、大形高速化の一途をたどっていた電子計算機の為の機械工学の重要性が認識され、一方では機械計測への電子技術の応用が活発化していた。従って、「電気通信大学に設けられた機械工学科」は、ユニークな存在として注目されていた。

しかし、新分野の開拓には試行錯誤が不可避であった。爾来20年、わが学科は幾多の困難を乗り越え、拡充改組による機械工学科への名称変更、大学院の新設、機械工学第二学科の増設へと発展し、機械系学科の基盤は着実に構築されてきた。

最近の電子技術の多様化は、機械工学にも大きな影響を与えている。特に我が国は、LSI 大国、工業用ロボット大国にのし上った。「電気通信大学の機械工学科」には、今や多種多様の進路が考えられる。これまでに築かれた基盤の上に、今後も、試行錯誤が重ねられながら、人材と研究成果とが世に送り出されてゆくであろう。

通機会の歩みも、やはり試行錯誤の歩みであった。単なる同窓会ではなく、在学生、更には教職員の方々にまで加わっていただき、機械学科関係者との連絡、親睦に貢献したいとの意気込みで出発した通機会であったが、卒業生が100名程度の時期には、やや高望みし過ぎた感がある。長く休眠を余儀なくされた通機会は、残念ながら、前記の学科の基盤構築に、その存在価値を発揮することが出来なかった。

しかし、学科発足以来20年、卒業生も1000名に達した現在、通機会が最初に掲げた目的を、実現してゆくべきではないかとの声がおこり、本年より再出発することとなった。既に卒業生は種々の分野で第一線に立ち、コミュニケーション組織の存在は、関係者に益するところが大きいといえる。

当初の経験をふまえて、まず名簿作成など比較的小規模な活動から再開し、これを軌道に乗せ、ルーチンワーク化してゆきたいと考える。これを順調に進める

為に、卒業生諸君には、通機会を通じて、母校及び我が機械系学科に関心を保持し、必要に応じてレスポンスすることを願いたい。また、在学生諸君、教職員の方々には、学外の多くの分野への「窓」の1つとして、通機会を御活用いただければ、通機会の存在価値が発揮されることとなる。

まず、コミュニケーション組織としての基盤を確立し、その上に立って事業を進めることにより、前記の学科発展の為の試行錯誤の効率化に役立ちたいと考える。御協力を切に願う次第である。

「通機会だより」によせて

機械工学科教授 田中 栄

昭和56年3月7日、それは私にとって生涯忘れることのできない感激と喜びの日であった。電通大機械系工学科創立20周年記念祝賀会が催されたその日、多数の卒業生諸君が母校に参集された。卒業されてから幾星霜、現在社会の中核として元気一杯活躍されている諸君と久しぶりの再会、懐しさがこみ上げてきて、しばし茫然たる有様であった。思えば昭和39年3月、第1回の卒業生を世に送ってから、すでに17年の歳月が流れ、現在通機会の会員数は1000名を超えるに到っている。まことに感慨無量である。

本学科の開設当初は僅か4講座にすぎず、本学においても機械系の研究、教育を行うことは、何をするにしても全くゼロからの出発であった。教官も不足、実習、製図、実験などを行うにしても、最小限の設備さえままならぬ有様であった。このような未整備の下で、初期の学生諸君は、新学科に対する認識と自覚のもとによく勉強されたと思う。その後、種々の経過はあったが、概ね順調に整備、拡充が進み、とくに昭和49年、機械工学第2学科の増設をみて、講座数は計9.5講座となり、こゝによりやく機械系両学科相俟って、社会の要求に応じ得る必要な講座編成と内容を備えるに到ったのである。教官陣容は充実し、教育、研究設備も整備されて、本学科の研究活動が一段と活況をみるに到ったことは当然である。またとくに近年、本学科卒業生に対して社会からよせられている期待は多大であって、就職状況は極めて順調である。

今日このように本学科が充実、発展したことは、本学教官、職員のたえざる努力によるものではあるが、一方卒業生諸君が、それぞれの職場において本学科卒業生としての真価をよく発揮され、今日までに築かれた多くの業績の賜であって、ここに心からの感謝と敬意を表したい。今後とも健康に留意されて、自重の上一層の御活躍を祈って止まない。

さて祝賀会当日、しばらく中断されていた通機会の総会が開かれ、今後一層円滑な運営をはかる機運に到ったことは、まことに有意義で喜ばしい。それに伴い今回構想も新に、「通機会だより」が刊行されることになった。これが会員相互の連絡と親睦に役立つきずなどとして、今後末永く継続されることを祈って、御挨拶と致したい。

第一回 通機会総会から

通機会の再出発を願って、通機会総会が本年3月7日に本学学生会館大集会室で104名もの多数の卒業生の賛同のもとに開催されました。議長、書記、司会にはそれぞれ、下河利行氏(40年卒)、紀井敏氏(55年、N卒)、清水弘幸氏(45年卒)の方々をお願いして議事の進行が行なわれた。以下、議事録より抜粋。

(議事1) 経過報告の件

灰塚正次氏(40年卒)より通機会の活動経過について報告があり、本会を通機会の再建総会としたい旨提案があり満場一致でこれを了承した。

(議事2) 新会則承認の件

灰塚氏より通機会の新会則が提案され、質疑応答を行ない満場一致でこれを承認した。

(議事3) 役員選出の件

通機会会則第7条より、通機会再建準備会が推薦する会長及び監査を満場一致で選出した。会長は直ちに副会長及び幹事を委嘱し、了承された。なお、クラス委員も紹介された。

通 機 会 会 則

第1章 総 則

- 第1条 本会は通機会と称する。
- 第2条 本会は会員の連絡と親睦をはかることを目的とする。
- 第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行なう。
1. 会員名簿その他の発行及び配布
 2. 講演会、見学会、懇親会等の開催
 3. その他本会の目的を達成するために必要な事業

第4条 本会は事務所を電気通信大学機械工学科内におく。

第5条 この会則に必要な通則は幹事会にて決める。

第2章 会 員

第6条 本会の会員は次の通りとする。

1. 電気通信大学通信機械工学科、機械工学科、機械工学第2学科の卒業生ならびに同大学院専攻科の修了者
2. 電気通信大学機械工学科、機械工学第2学科ならびに同大学院専攻科に在籍する学生
3. 上記各学科に所属する現・旧教官
4. その他幹事会で適当と認めたもの

第3章 役 員

第7条 本会に次の役員をおく。

会長 1名、副会長 2名、幹事 若干名、監査 2名、クラス委員 各クラス1名

第8条 会長及び監査は総会において会員中より選出される。

第9条 副会長及び幹事は会長が委嘱する。

第10条 クラス委員は各クラス毎に選出する。

第11条 会長は本会を代表し、副会長は会長を補佐する。

第12条 幹事は幹事会の議に沿って会務を処理する。

第13条 クラス委員は各クラスと幹事会との連絡を密にする。

第14条 監査は会務を監査し総会に報告する。

第15条 役員の任期は次の通常総会までとする。

第4章 総会及び幹事会

第16条 本会の最高決議機関を総会とする。

第17条 総会はその議案、日時、場所を会員に衆知したうえ会長が招集する。

第18条 総会の議事は出席者の過半数によってこれを決める。

第19条 通常総会は4年に1回開く。

第20条 会長が認めた時または、会員の50名以上から請求があった時は臨時総会を開く。

第21条 幹事会は会長が必要と認めた時に招集する。

第5章 会 計

第22条 本会の経費は終身会費、寄付金、その他をもってこれにあてる。

第23条 本会の会計はその収支決算を通常総会において報告しなければならない。

第24条 終身会費は金五千円とする。

第6章 付 則

第25条 本会の会則の変更は総会の決議を必要とする。

第26条 本会則は昭和56年3月7日より施行する。

通 機 会 役 員 名 簿

(第1期：昭和56年度～昭和60年度)

注) ○印 学外勤務

会長 ○大賀寿郎 (39)
 副会長 梶谷 誠 (39) ○狩集二郎 (53)
 幹事
 ○日比 進 (39) 川西哲夫 (40) 灰塚正次 (40)
 横内康人 (40) ○宮地隆太郎(43) 清水弘幸 (45)
 益田 正 (45) 小泉博義 (46) 石川晴雄 (47)
 村田 真 (47) ○奥村秀人 (49) 高松 徹 (49)
 根本良三 (50) ○市毛嘉彦 (51) 山田 実 (51)
 石井 明 (53) 秋田 敏 (現教官)
 紀井 敏 (55) 樋掛正俊 (55) 平田教行 (56)
 菅谷正弘(4M) ○須原利昌(4N) 吉田純一郎(4N)
 監査 ○下河利行 (40) ○新井信夫 (53)
 クラス委員
 ○日比 進 (39) 灰塚正次 (40) ○川橋正昭 (41)
 ○松坂 修 (42) ○宮地隆太郎(43) ○久継繁昌 (44)
 益田 正 (45) 小泉博義 (46) 村田 真 (47)
 ○中山良一 (48) 高松 徹 (49) 根本良三 (50)
 ○市毛嘉彦 (51) ○四十物次郎(52) 石井 明(53M)
 ○新井信夫(53N) ○高橋秀雄(54M) ○沼田博美(54N)
 ○西田紀夫(55M) 紀井 敏(55N) 平田教行(56N)
 菅谷正弘(4M) 須原利昌(4N) 吉田純一郎(4N)
 千葉一郎(1M) 山田 豊(1M) 清水公干(1N)
 吉村 孝(1N)

機械工学系学科創立20周年記念祝賀会 大盛況に開催さる

日時 昭和56年3月7日(土)午後6:00～8:00

会場 電気通信大学福利センター東食堂

司会 梶谷 誠

第1回通機合総会閉会后、ただちに祝賀会が開会された。昭和55年度機械工学系学科主任石川二郎教授の御挨拶後、田中栄教授により機械工学科20年の歩みについてお話を頂いた。つづいて、平島正喜電気通信大

学学長、武藤彰目黒会会長に来賓の祝辞を頂き、卒業生代表として大賀寿郎通機合会長が祝辞を述べ、博田五六電気通信大学前学長の首頭により参加者一同の乾杯が行なわれた。和やかに懇談が進み、数人の卒業生が学生生活の思い出や現況を述べるなど、名残り深きなか、機械工学系学科の発展を一同確信しながら祝賀会は閉会された。

田中先生ご退官記念行事について

田中栄先生には、今年(56年度)をもちましてご退官されることになりました。すでに皆様、ご承知のように、先生は、電気通信大学教授として永年にわたり本学に奉職され、学問研究の分野において幾多の功績を残され、かつ本学学生の教育に情熱を傾けられて多くの優秀な人材を社会に送り出されました。このご功績に報いるべく、いま学内においては、機械工学科、機械工学第二学科を中心に、通機合も参画して、田中栄先生退官記念会を発足させ、先生のご退官記念行事について計画中であります。およその予定としては、57年中に記念講演会、並びにご退官祝賀会を開くことにいたしております。会員の皆様におかれましては、どうぞこの計画にご賛同いただき、是非ご参加下さいますよう、お願いいたします。なお、日時、場所などの詳細は決定次第お知らせいたします。

田中栄先生退官記念会

教官の異動(通機合名簿記載外)

昭52. 4. 1 小野田源彦助手退官

昭56. 4. 1 武井 健三教授退官

母 校 の 現 状

電気通信大学は、11の学科（入学定員 620名）と各学科の上に同名の大学院専攻科（修士課程 入学定員 104名）が設けられている。更に、電気通信研究施設、菅平宇宙電波観測所、情報処理センター、新形レーザー研究センター、保健管理センターなどが設置され、研究と教育に貢献している。

機械工学系学科は、昭和35年に通信機械工学科として設立され、昭和41年には機械工学科に名称変更、更に拡充が行なわれた。そして、昭和49年に機械工学第二学科が増設された。現在は、10講座からなる機械工学系学科として二学科が一体となって運営され、毎年約100名の学部卒業者と約18名の修士を世に送り出している。また、短期大学部（夜間3年制）通信工学科の通信機械コース（入学定員40名）は機械工学系であり、学部と研究・教育の両面で密接に協力し合っている。

電気通信大学電気通信学部

電波通信学科	(60)
通信工学科	(60)
電子工学科	(60)
応用電子工学科	(60)
経営工学科	(60)
機械工学科	(50)
機械工学第二学科	(50)
材料科学科	(60)
物理工学科	(50)
計算機科学科	(60)
情報数理工学科	(50)

(カッコ内は入学定員)

機械系学科の講座と教官（56年10月1日現在）

学科名	講座名	教授	助教授及び講師	助手
機 械 工 学 科	機械要素	成瀬長太郎	石川 晴雄	根本 良三
	機械工作法	鈴木 秀雄	横内 康人	村田 真
	弾性及び塑性学	田中 栄	秋田 敏	高松 徹
	熱流工学		内田 豊	小泉 博義
	固体力学	皆川 七郎	本間 泰二	山田 実
機 械 工 学 第 二 学 科	機械力学		石井 鈴枝	清水 弘幸
	機械材料	市川 昌弘	酒井 拓	大橋 正幸
	自動機械学	石川 二郎	梶谷 誠	益田 正
共 通	信頼性工学	佐々木茂美	越智 保雄	石井 明
	流体工学		黒田 成昭	
短 期 大 学 部	通信機械	佐藤 公子	根岸 秀明	
	コース		灰塚 正次	

編 集 後 記

*先日当学科の後輩の結婚式に参列した時、何人かの卒業生にお目にかかったが、皆超一流メーカに勤め、小生より多分多くのサラリーを取っているらしいのには、残念というより驚いてしまった。その中のあるメーカに勤める後輩はある事で某公社と関係があるというので、それでは某という人を知っているかと聞いてみると、何時もお世話になっているという。そこで、その人はうちの学科の先輩だよ、と言うと大変驚嘆していたが、それだけ当学科の卒業生も増えたという事なのだろう。別に関をつくる必要もないが、同窓生同志が知り合いであったために、仕事がうまくいったとしても、悪いことではないだろうと思う。そんな仲たちが少しでもこの通機会だよりができたらと願いつつ、編集していきたいと思います。どうか皆様よろしくご協力お願い致します。

(K)

*通機会再発足に際し、以前の会誌に代って、本紙のような通機会だよりを発行することになりました。会員各位の積極的な御協力をお願いし、次号よりの発行を継続したいと、編集者一同張り切っています。

さて、ここ数年、学内では毎年のように校舎・研究施設・寮などの建築が行なわれ、機械工学系学科にも立派な工場が建設されました。今年は、講堂並びに新形レーザー研究センターが建築されつつあり、講堂の完成は間近に迫っています。

一昔以前に卒業された方々にとっては、学内の変貌は著しいものと思われます。11月21日から23日まで、調布祭が開催されますが、学生時代を思い出し、後輩諸氏と語らう機会を持たれてはいかがなものでしょうか。(S)

*9月の発行が伸び々々になって11月になってしまった。編集委員内では霜の降りる前に会員の方々に配布できれば、秋季の発行ということで一応、形がとれるのではないかとという雰囲気があった11月の発行となりました。内容的には、通機会の再発足ということもあり、最近の華びやかな創刊号には程遠いものとなりましたが、次号からは、即ゴミ箱行きにならないような内容したいと思います。(I)

*学生生活も、もう6年が過ぎようとしている。2年前に卒業した連中は、一人前の社会人となっていることだろう。これを書いていて思い出したが、先日データショーに行ってきた。どこのOAも漢字処理システムが主流であったが、方式に多少差があるにしろ大した違いはなかったようだ。原稿の編集もCRTにディスプレイしながらやる時代もうじきであろう。(M, H)

*秋が深まり行く今日此頃、世間を賑わせているニュースは暗いものばかり、そんな中で唯一明るく人目をひくニュースは、コンピュータの発達、特にメカトロニクスの発展である。なんとなく電通大機械科の時代到来といった気がする。このような時期に、「通機会だより」創刊号が発刊されるのは、偶然ではないのではないか？(N, H)